

**Japanese A: literature – Higher level – Paper 1**  
**Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1**  
**Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1**

Monday 9 November 2015 (afternoon)  
Lundi 9 novembre 2015 (après-midi)  
Lunes 9 de noviembre de 2015 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

**Instructions to candidates**

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

**Instructions destinées aux candidats**

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

**Instrucciones para los alumnos**

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

次の文章と詩のうちどちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

## 1.

ベンチの前を通りすぎた人の手に、コーヒーカップが握られていて、慌てて目で追つてみたのだが、持ち主は中年の白人男性だった。公園のベンチで長い時間ぼんやりしていると、風景というものが実は意識的にしか見えないものだとすることに気づく。波紋の広がる池、苔生した石垣、樹木、花、飛行機雲、それらすべてが視界に入っている状態というの、実は何も見えておらず、何か一つ、たとえば池に浮かぶ水鳥を見たとき意識してはじめて、ほかの一切から切り離された水鳥が、水鳥として現れるのだ。では何も見ていないとき、あるいはすべてが視界に入っているとき、実際には何が見えているかという、たとえばさつき通りすぎたコーヒーカップの残像から、ぼくの目には、学生ころ一人旅をしたニューヨークで、生まれてはじめて入ったコーヒーショップの店内が広がっており、鼻先にはコーヒー豆を煎る香ばしい匂いとシナモンの香りが漂っている。注文カウンターにはヘビー級のボクサーのような屈強な黒人青年が立っていた。睨むようにこちらの目を見つめて、早口に次々と何かを尋ねてくるのだが、その単語の一つとして聞き取れない。苛々とカウンターを叩く黒人青年の太い指には、シルバーリングがいくつもつけられている。仕方なくすべての質問にYESと答えると、かれはうんざりした顔で注文を奥に通した。しばらくしてカウンターに出されたカップを受け取り、店内を逃れてテラス席へ出た。椅子に腰かけ、ふつと息をつけば、ニューヨークの市街を歩き回った疲れが急に出る。からだを屈めて、ふくら脛を指で揉んだ。心地よい痛みで脚全体がジーンと痺れる。目の前の並木道を枯葉が埋めつくしており、遠くから漆黒のドーベルマン<sup>1</sup>に手を引かれた白髪の老婦人が近づいてくる。その姿がとてもシックで、つい見惚れてしまった。ふと、近づいてくる老婦人が実は男性かもしれないと思ったのは、ワシントンスクウェア公園広場から聞こえるテナーサックス<sup>2</sup>がステイキング<sup>3</sup>の「Englishman in New York」を奏でているせいで、そのミュージックビデオに登場していた老嬢が、実は男性で、クエンティン・クリップというイギリスの作家であることを教えてくれたのが、高校時代の同級生ひかるだったことを思い出す。（略）十六歳の春、バスケット部だったぼくは、体育館で体操部のひかるに一目惚れした。その夏、勇気を振り絞って告白したのだが、どうしても恋愛対象として見ることができな

いと言われた。「弟にそっくりだから」という理由で、ぼくの告白は反古ほんごにされたのだ。

(略) コーヒーショップのテラス席でなにげなく二の腕を揉みながら、並木道を遠ざかる  
 30 ドーベルマンと老婦人の姿に目を奪われていたせいも、背後の店内で騒ぎが起こっている  
 ことに気づかなかつた。振り返り、耳に神経を集中させて店員の黒人青年とフレーム  
 のない眼鏡をかけた女性客との会話を聞いてみると、どうやらぼくが間違えて、彼女の  
 ノンファットだかローファットだかのミルク入りコーヒーを先に持ってきてしまったら  
 35 しいのだ。こちらとしては次々と浴びせられた質問にすべて YES と答えたままで、代  
 金を払ってカウンターにカップが出てくれば、それが自分の注文した品だと思ふ。女性  
 35 客は店内にいるすべての客のカップを調べ上げそうな勢いだつた。カップを持ち、慌て  
 てそのテラス席から逃げ出すように、視界の遠近をゆるめると、心字池<sup>4</sup>の石塔いせきとうが、グ  
 ンと目の前に迫ってくる。ベンチの前を若いサラリーマンが通りすぎ、ちらつとこちら  
 を一瞥いちげつする。通りがかる人には、たとえばぼくがこのベンチでニューヨークのコーヒー  
 ショップの店内や、もう何年も前のひかる(略)を思い描いているとき、ぼくが何を眺  
 40 めているように見えるのだろうか。視線の先にある池や石塔を眺めているように、ちや  
 んと見えているのだろうか。こうやってぼんやりした状態からふと我に返るとき、とき  
 とき戦慄せんりつのようなものが走る。いま自分が見ていたもの、記憶のような、空想のような、  
 どこかあいまいで、いわばプライベートな場所を、通りすがりの人に盗み見られたよう  
 な気がするのだ。

吉田修一 『パーク・ライフ』二〇〇二年

<sup>1</sup> 『ドーベルマン』…ドイツ原産の犬種。

<sup>2</sup> 『テナーサククス』…楽器サクソフオーンの一種。

<sup>3</sup> 『ステイキング』…イギリス人のミュージシャン。

<sup>4</sup> 『心字池』…「心」の字の形をした池。ここでは東京千代田区日比谷公園内にある心  
 字池を指す。

2.

**石を蹴<sup>け</sup>る**

不用意に小石を蹴つてはいけない  
あなたの足が小石を蹴るとき  
つま先にはじける電気の具合で  
あなたは石に試される

- 5 長い一本道をゆく所在のなかに  
ふと目についた小石を  
ひよんと蹴った経験は  
たぶん誰にでもあるだろう  
二、三度蹴つて
- 10 それきりよしてしまふ場合が多いが  
どういふわけか  
放<sup>ほう</sup>つておけずに  
川へ落ちたら拾いにいき  
道をそれたら取りにいき
- 15 くりかえし  
くりかえし蹴つて  
蹴り続け  
とうとう家まで連れてきた  
そういう人もいるだろう
- 20 そしてなかには  
どうにも別れられなくて  
家のなかに招きいれ  
以後  
生活をともにする

- 25 そんなケースもあるのですよ  
石は比較的大食であるが  
いくら食べても  
大きくなったり歩いたりしない  
ものを言ったり笑ったりもしない
- 30 石を子どもにしたい人には  
その点  
物足りないかもしれないが  
友人には最適  
あなたより先に眠りにつかず
- 35 ささいな話に耳をかたむけ  
ときどき歌を聞かせてくれる  
何よりもそのやさしきは  
あなたが死んだあとに発揮される  
親も姉妹もないあなただから
- 40 死体の発見は遅れるけれど  
石は  
決して見捨てることはない  
あなたのからだは溶け  
液体になり
- 45 それから乾いた粒子になって  
暈のうえをチリのように舞いはじめるまで  
石は  
黙ってそばにいる  
安物の涙をながすこともなく